

シートンに学ぶ

河合雅雄 (兵庫県立人と自然の博物館 名誉館長)

シートンとファーブル

アーネスト・T・シートンの動物記は、わが国では子ども時代に最もよく読まれる本の一つであろう。とくにその中の「狼王ロボ」を読んで深く感激した人が多いと思う。じつは、シートンは「動物記」という本は書いていない。たくさんの野生動物の物語を書いたが、それらを日本で初めて訳した内山賢次が、これらの物語を18巻(評論社)にまとめて『動物記』の名で出版したことによる。わが国では『古事記』以来、「記」になじんだせいもあってかすっかり定着し、その後の藤原英司や今泉吉晴の訳も、「動物記」を踏襲している。



『シートン動物記』と並んで有名なのは、「アンリ・ファーブル」の『ファーブル昆虫記』である。これも原題は『昆虫学的回想録』だが、最初に訳した大杉栄が『ファーブル昆虫記』として出版したのが定着した。この後、山田吉彦、林達夫(岩波文庫20冊)、奥本大三郎(集英社、刊行中)も、「昆虫記」の名を使っている。

ところで、両者の名が有名で愛読者が多いのは日本だけで、本国ではあまり知られていない。奥本大三郎によると、パリの著名な古本屋でも『昆虫学的回想録』を探すのは大変だということである。アメリカのサンタフェの近くにシートンが自然学校を開き大変賑わった通称「シートン・カースル」と呼ばれるシートンの家がある。そこを訪ねてみたが、すっかりさびれていて家の手入れも悪く、番人が一人いるだけ。訪ねる人も少なく、一番よく来るのは日本人だということだった。



シートン・カースル

日本で人気のある証拠と言おうか、ファーブルの伝統を継承し、研究を深め発展させたのは日本の研究者で、岩田久二男(神戸大教授)、勝本常次(福井大教授)、坂上昭一(北大教授)の三人である。岩田は達文の人で『日本昆虫記』(全5巻)などを出版して日本のファーブルと称せられ、坂上はそのすぐれた業績で朝日賞を受賞した。三人の標本、フィールドノート等の遺品はすべて人博に収納されており、人博が誇る宝物である。

E・シートンは、1860年イギリスに生まれた。父は海運業を営んでいたが破産し、シートンが5歳の時カナダのケベックへ移住した。シートンは大変多彩な人で、ナチュラリスト、作家、画家の三分野の完成を追求し、それぞれの分野で立派な業績をあげた。簡単に紹介したい。

画家

シートンは幼時から絵が上手だった。父親はその才能を見込み、画家として大成することを望んだ。しかし、シートンは野生の動物が大好きで、猟師の話聞くのを好み、野外での遊びに熱中した。大学で動物学を勉強しようと思ったが、父親の猛反対にあい、授業料は出さないとされた。



シートンの肖像

ならば奨学金をとろうと猛勉強し、高校ではトップの成績をとってトロント大学に入学した。しかし肺を悪くし、家で養生していたが、その間猟師と仲よくなりナチュラリストとしての素養を深めた。

治るとロンドンのロイヤル・アカデミーに入学し絵の勉強に励んだ。しかし、またもや健康を害し、家へ帰った。目的を達せられなかったのに父親は怒り、その間仕送りした 53,750 ドルの請求書をつきつけて返済するように命じた。一人前の個人として息子を扱う父ジョセフの態度は厳しすぎると思う人が多いだろうが、むしろ日本の親は子どもに甘すぎることを反省させられるエピソードだと思う。

31 歳の時パリに渡り、「眠れる狼」がサロンに入選した。気をよくしたシートンは次に自信作「狼の勝利」を出品したが、見事に落選した。それは狼狩りのハンターが逆に狼に殺され、その骸骨に狼が咬みついている絵である。余りに残虐でしかも人間を冒瀆する神を恐れぬ不埒な絵として、審査員の不評を買ったのだった。

シートンは狼を描くために、犬を何頭か解剖した。骨格系筋肉系のしくみを知り、正確な姿をリアルに描くためである。表情や行動が真に迫り、見る者にリアルな感動を与えるのはそのためである。シートンの作品がよく読まれるのは、シートンが描く挿絵の迫真力にもよるところが大きい。

ナチュラリストとして

野生動物をよく観察し、開発に迫られる動物たちの保護者として活躍するシートンは、ナチュラリストとしてしだいに有名になっていった。33 歳の時、ニューメキシコ州の牧場主から狼退治の依頼を受けた。ロボと呼ばれる巨大な雄狼が一家を率い、毎日確実に牛を殺す。狼捕りの名人と称される何人かが捕獲を試みたが、いつも巧妙に裏をかかれ、打つ手がない。そこで野生動物の習性に詳しいシートンなら、ロボとのチエくらべに勝てるだろうというわけ。シートンはいつもは迫害される狼の味方だったが、この依頼を受けることにした。なぜならロボを生かしておけば、狼全部の評判が一層悪くなり、あげく全米の狼を絶滅せよとの世論にまでエスカレートする恐れがある。この際ロボにはかわいそうだが、犠牲になってもらうより仕方がないというわけである。



狼王ロボの肖像(シートン画)

シートンとロボとの知恵をしぼっての戦いは、「狼王ロボ」に詳しいが、シートンの戦術はすべて見破られ、どうしてもロボを捕えることができない。シートンは正面からの戦いを諦め、ロボの妻白い狼のブランカに目をつけた。狼の群れは一夫一妻の家族集団である。シートンの策略にかかって、ブランカは捕えられ殺される。そしてブランカのおいづけした畏に、ついにロボが捕えられる。ロボは与えられた食物を一切拒否し、死ぬ。ロボのブランカへの愛情の深さ、それ故に捕えられたロボ、まさに狼王にふさわしい最後であった。

この実話を元にして書いた「狼王ロボ」は熱狂的な評判を得、シートンは一躍有名人の座に上った。シートンは西部開拓で迫害された野生動物と、先住民のインディアンの味方として大活躍をする。シートンはまた講演の名手で、野生動物の真似も巧みなので聴く人を魅了し、引っぱりだこだった。

自然保護活動と子どもの教育

ニューヨークの近くに 49 万㎡の土地を購入し、毛皮獣飼育施設を作る。上質の毛皮を安価で売ることにより、野生動物の狩猟を減少させる目的のためである。また、カメラハンティングという言葉を作り、銃よりカメラを推奨したのもシートンである。

シートンは子どもの自然教育に力を注いだ。10 歳から 16 歳までの子どもを集め、ウッドクラフトを知るしくみを教えた。そして、キャンプの仕方、野生動物の観察法などを詳しく説明した。「カバノキの樹皮の記録」を作製した。シートンが始めた少年の野外教育の運動は大きな共感を得、ヨーロッパ諸国やロシアまで広がった。

1927年シートンは『狩猟獣の生活』を出版する。ナチュラル・ヒストリーの傑作である。今泉吉晴の訳で全12巻が紀伊国屋から出版されている。1932年72歳の時サンタフェの近くにシートン村を作り、「インディアンの知恵の大学」を開校して多くの自然愛好者を育てた。第2次世界大戦によって閉校、46年に86歳の生涯を閉じた。

「4歳から94歳まで」を対象にしたすぐれた動物文学を書き、迫害される野生動物とインディアンといった弱者の味方を貫き、私財を投入して子どもや社会人の自然教育に一生を捧げたシートンから、私たちは多くを学ぶ必要があります。インディアンの知恵の大学の学生になったつもりで、自然から多くのことを学んでいきたいと思う。